聞いてくらんし佐渡事情　しなしな行かんか島暮らし

島の新聞

島の新聞
発行所
〒952-0108　佐渡市上新穂646－9
島の新聞社
電話　0259-67-7630　FAX　0259-67-7630
http://www.k5.dion.ne.jp/~simanews
メール shima-shin@honey.ocn.ne.jp
印刷　株式会社佐渡中央印刷所
定価　210円　95号

島の新聞憲章

島力（しまぢから）をつける
バラバラでいっしょ
おもしゅう、おかしゅう
魚眼と鳥瞰

佐渡鷺流狂言

江戸時代に鷺仁右衛門が創作した鷺流狂言は大正末期に中央では廃れてしまい、現在は山口県と佐賀県と佐渡にのみ継承されている。佐渡でも明治期に途絶えたと世に伝わっていたが、昭和初期まで演じられており、戦後の経済成長期になって存亡の危機に陥った。トキと似たような経緯を辿ったサギ（鷺流）の運命に島独特の隔世の文化・風土を想う。

狂言の世界　主役は山伏や盗人

▲蚊相撲　ある大名が太郎冠者（たろうかじゃ）に相撲取りを探してくるよう命じる。連れてきた男は蚊の精（緑の装束）。相撲を取る場面では相手の血を吸う体勢をとる。蚊の精は狂言面の嘯吹（うそふき）をつける。狂言では人間でない存在（蟹・神鳴・案山子など）は面をつける。武蔵国分寺薪能。写真撮影：本間祐亨

▶蟹山伏を演じる中学生。真野中学校の2011年文化祭で。写真は真野中学校提供

▲蟹山伏　山伏が強力（ごうりき）を従えて山道を歩いていると、蟹の精が現れ邪魔をする。強力が金剛杖で蟹を打とうとするが、逆に蟹に耳を挟まれる。
◀蟹の精に耳を挟まれている山伏と強力。2014年總社神社例祭。写真撮影：本間祐亨

▶盆山盗人（右写真）　盆山の陰に隠れていた盗人を主人がみつけてなぶる。犬かなと言うと「ワンワン」、猿と言うと「キャアキャア」と猿手を真似る。「鯛」という難題を出し、「鯛ならヒレを立てそうなもの」と言うと、盗人が扇を立てて鯛の鰭に見せる。今年の總社神社例祭

▲柿山伏　柿の木の上で柿を食べている山伏を見つけた柿主が、鳥か、猿かとからかう。山伏はその鳴き真似をする。そこで、鳶だ、「飛ぼうぞよ」と囃すと、山伏はバタバタ飛び降りるが、腰を打つ…。總社神社例祭。

神鳴（かみなり）　落雷して腰を打った神鳴を似非医者が治療する。神鳴は治療費の代わりに五穀を成就する天気を願う医者に応える。治療を痛がり騒ぐ神鳴が愉快。

四月十四日の總社神社例祭の前夜祭では鷺流の番狂言が恒例となり、今年は小雨そぼ降る肌寒い夕べに「柿山伏」「盆山盗人」「鳴子」の三番が演じられた。シテ（主役）とアド（脇役）が滑稽なかけあいをしながら、物まねやだまし合いをする。

「番狂言」とは佐渡独特の呼称で、能の合間に演じられる間狂言（あいきょう）に対して、独立した本狂言のことを言う。間狂言は一人でもできるが、番狂言は二人以上で演じる。一時期、番狂言はできない状況だった。

「佐渡狂言は鷺流と言って珍しいもので、自分しか舞台を務められる者がいなくなった」と故土屋増一氏が一九七五年頃話していたことを世尊寺住職の本間裕亨（68歳）さんは聞き流していた。

一九八〇年三月、途絶えたとされていた鷺流狂言が佐渡島で細々と継承されていた（その訳は4ページに）と知った研究者たちが確かめに来島した。能楽研究の第一人者、武蔵野女子大学の小林責教授らは土屋さんの演じる間狂言を見て、鷺流の流れを汲むものと見なし、役者がいた旧真野町に保存を求めた。

真野町教育委員会では真野能楽会、文化財保護審議会、中学校長らと鷺流狂言の保存と伝承について話し合い、翌八一年から真野中学校ではクラブ活動に、一般は公民館の講座に取り入れ、その受け皿として佐渡鷺流狂言研究会を設立した。研究会は約一〇人でスタートし、真野町教育委員会に勤務していた本間裕亨さんが事務局を務めた。

番狂言の稽古は「昔観たことがある」「やったことがある」という「年寄」に見てもらいながらすすめた。幸いにも台本は保存されていた。崩し筆文字が読める裕亨さんが若林義太郎家所蔵の台本を翻刻（ほんこく）し、形付（かたづけ）する（動き方を決める）。勤務外の夜の作業が続いた。

台本は形付があるもの、ないもの、口伝でまったくない部分もあり、台詞だけでは実際にどう動くのかわからない。いくつもの資料を元に台詞に伴う動きを調べ、それに従って動いてみて、「それは変じゃないか」「これでは動けないなぁ」などと言い合いながら直して、一年に一演目ずつ仕上げた。この地道な作業を積み重ね、これまで三〇演目を持つに至った。

初めての発表会は八一年十月十五日、真野祭りの大膳神社で。以来、年一回の発表会、總社神社や各種イベントでの番狂言、真野能楽会はじめ各地の演能の間狂言を務めている。一九八四年には新潟県の無形文化財に指定される。

また山口鷺流保存会との交流や、国立能楽堂での山口・佐賀・佐渡の三地域の共演、県民文化祭への参加、佐渡市と姉妹都市の国分寺市の芸能祭への参加など、珍しい鷺流狂言を各地で披露している。

現在の演者は一〇人、うち女性は二人、祝日と年末年始を除き、週一回稽古をしている。真野中学校では、二〇〇二年の教育課程の改正により、「総合的な学習の時間」が設けられ、そのなかの「総合郷土」でとりくまれている。

現在演技を指導しているのは三代目会長の北村和雄さん（84歳）。

「五十代で囃子方の鼓を習うつもりで入ったが、一〇人しかいなかったので、狂言をやれ、笛を吹け、大鼓（おおかわ）もと言われて、なんでもやった。急に頼まれてもすぐできる演目を一年に二～三番は持っておくように稽古をつけている」

「中学生は覚えがいい。むずかしい漢字もすぐ読める。教えた生徒が大人になって入ってくれるか期待しているが、まだ一人も入らん」と嘆く。だが、有望な四十代が三人いる。（4ページに続く）

北村さんに装束を着けてもらう中学生。真野中学校提供

佐渡の野鳥　95

コシアカツバメ

日本野鳥の会会員　近藤　健一郎

佐渡で見られるツバメの仲間は四種います。北海道で繁殖していて春と秋に通過するだけのショウドウツバメを除く残りの三種（ツバメ、コシアカツバメ、イワツバメ）は、夏鳥として佐渡に渡って来て繁殖しています。ツバメは全島に分布していて、人家の周辺で普通に繁殖しています。

コシアカツバメとイワツバメの分布は局地的で、特にコシアカツバメは数が少なく、近年渡来数が減少している種です。このため、昨年見直された新潟県のレッドリスト（保護上重要な野生生物の種のリスト）では新規掲載種となり、存在基盤が脆弱な種である「準絶滅危惧」のカテゴリーに分類されています。

コシアカツバメ（腰赤燕）はツバメよりやや大きく、腰が赤褐色をしているためにこの名前が付けられました。腰の赤褐色部は飛んでいる時はよく見えますが、翼を折りたたんでいると見えません。海岸に近い市街地の建物に泥を材料に徳利を縦割りにしたような特異な形をした巣をつくり繁殖しています。以前は相川地区や小木地区のホテルのビルに集団で巣をつくっていましたが、消滅してしまい、現在は小木地区でごく少数の繁殖個体が確認されているだけです。

集団で営巣している巣の下は糞で汚れるため、ホテルなどでは嫌われて巣を壊してしまうこともあったようです。これもコシアカツバメが数を減らしている一因かも知れません。益鳥の代表格であるツバメの仲間です。子育てが終わるまでやさしい気持ちで見守ってやりたいものです。

巣材の泥をくわえる

25周年記念誌「佐渡鷺流狂言研究会のあゆみ」2007年発行